

性格特性からみた女性の自立心・依存心

Women's Independence and Dependence Examined from
Viewpoint of Personality Traits

三田 英二
MITA Eiji

I. 問題

女性の青年期における自己形成について検討している。本研究もこの一環として行われている。

青年期が、社会に認知されから100年余りになる。もともと生物としての人間は、乳児と児童と成人という年齢カテゴリーの集団からなるのが自然な形であった (Bruner, J.S., Jolly, A., & Sylva, K., 1976)。社会・経済的状況の変化から“青年期”が誕生した。すなわち、第二次性徴期を迎え、身体的には“成人”と同じになっても、社会を支える生産メンバーとはなれず、社会的には“成人”とは認められない発達段階が出現し、その発達段階を“青年”と呼んだのであった。人間の社会集団の中では、“青年”は普遍的存在ではないのである。このため、“青年期”は“文化的に作られた”発達段階と呼ばれる。

人間社会に“青年”が登場し、社会は“青年”への対応を迫られた。二関 (1975) は、「青年に対する関心や理解の試みは、様々な接近や意図から行われた。」とし、そして、「それらすべての関心と認識は、『青年とはなんであるか』、『青年と他者が区別される特性とは何であるか』という問いに集中される。」(p.192) と述べている。

“青年心理学の父”と呼ばれるホール (Hall, G.S.) は青年期を「身体の急速な変化による不安と動揺の時期」だとした。これが、青年期をとらえる基本的な枠組みとなった。しかし、急速に社会が変化する時代においては、価値観が固定されず、青年を捉える枠組みも常に修正していかなければならない。まして“普遍的存在”ではなく“文化的”に作り出された“青年期”は、生物としての役割は固定されていないのであるから、どのようにも変化する発達段階と考えるべきだと思う。現代のNEET問題やフリーターの問題など考えれば、社会経済状況により、どのようにも変化する発達段階ということが理解されることと思う。

しかし青年期は、社会の生産メンバーとなる成人期の前の段階であることも、また事実である。成人期に移行できるように準備をしていかなければならない段階でもある。このため多くの研究者が青年期を「親からの自立」の時期ととらえている (たとえば、「心理的離乳」(Hollingworth, L.S.)、「脱衛星化」(Ausubel, D.P.) など)。

西平 (1990) は、青年期の心理的離乳に関して、従来から指摘されている思春期の心理的離乳を「第1次心理的離乳」とし、青年期後期に「第2次心理的離乳」の時期が訪れるとしている。前者は「親からの離脱、依存性の払拭に重点をおくもの」であるのに対し、後者は「離乳後に育つべき自律性に重点を移したもの」(p.45) とし、「この第2次心理的離乳は、第1次の

諸特質を引き続きながら、次第に自立、独立の方向に重点を移し、より客観的、自覚的になり、一対一の人間関係として両親との絆を再び強めさえる。」(p.50)と述べている。しかし、「青年期中期に入ってしばらくはこの第1次心理的離乳が続くが…(中略)…多くは次第に質的に変容しながら、不徹底だった心理的離乳を押し進め」、「両親の欠点や短所には厳しい批判を浴びせるが、同時に両親の生育史や現在の環境などにも目を注ぎ、同情や共感もできるようになる。」。しかし、「外面的にはなおかなり激しい反発や離反がつづき、…(中略)…青年後期の第2次心理的離乳は、行動はますます独立し離反するものの、内面的にはより親和的、建設的になり、本格的な主体性の主張を始める。」(pp.50-51)と青年期の親からの自立の過程を示している。

しかし、従来の自己形成理論は男性中心に構築された理論という批判は多い。渡邊(1995)は、「…女子青年のこの親依存が西平のいう親との絆を意味しているとすれば、女子は青年期中期にすでに第2次心理的離乳に移行しており、むしろ男子の中期以降の親依存の低下は、第1次心理的離乳の現われであり、男子の方が遅れていることになる。このような見方は、青年心理学においてほとんど見当たらない。それは、男子青年が女子青年より独立的であるに違いないという暗黙の前提があるからではないだろうか。」(p.82)と批判する。そして、「少なくとも「相互依存社会」といわれるわが国では、欧米の依存・独立の概念に基づいて、男子青年が親から心理的離乳をしているが、女子はしていないと解釈することは誤りであり、むしろ男女とも親との絆・依存を基盤に自立に向かうといえそうである。」(p.83)と主張した。

また、女子青年の親子関係について、欲野(1994)は、ブロス(Bloss, P.)の“第2の分離・個体化”を紹介する中で、「18から22歳の「個体化期」になると…(中略)…心理的な離乳もかなり進み、親への嫌悪感や否定感へのこだわりも薄れて、肯定的な評価へと変化してくる。」(p.122)としているが、青年期における心理的離乳については、男子より女子の方が難しく、アンビバレントな葛藤が強く、その解決は容易ではないことを指摘している。

このように、女性の自立心・依存心については、まだ検討しなければならない課題が多く残されている。本研究では、まず、基本的な観点を明らかにすることを目的として行う。すなわち、内的準拠となる性格から検討を加えていく。青年期において、自立心が高い群と依存心が高い群の性格特性を直接比較しその差異を明らかにすることを目的として行う。

II. 方法

1. 調査対象者

青年期は拡大の方向にあるという指摘がある。三田(2003)は、本来、成人期前期段階の年齢でも、心理構造としては、青年期後期段階と推測している。本研究では、青年期において自立心が高い個人の性格的な特徴と依存心が高い個人の性格的な特徴を明らかにすることを目的としているため、従来の発達区分である成人期前期段階も含めて分析の対象とする。

調査対象者は、青年期後期の調査対象者として短大・専門学校に在籍する女子学生90名(平均年齢19.18歳、SD=.76、range18-21)、成人期前期の調査対象者は80名(平均年齢25.98歳、SD=2.09、range22-30)、計170名(平均年齢22.39歳、SD=4.22)を分析の対象とした。

なお、調査対象者について、プライバシー保護の観点から婚姻の有無の調査はしなかった。

2. 用具

(1) 自立心・依存心の測定

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」（項目4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 35, 36）、第2因子「親への依存」（項目20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 33）、第3因子「時間的展望の拡散」（項目3, 13, 14）、第4因子「反抗期心理」（項目28, 30, 31, 37）、第5因子「自信の欠如による親への服従」（項目17, 18, 26, 29, 34）の5因子が抽出されている。

このうち、本研究では第1因子「自己決断力」因子と第2因子「親への依存」因子の項目を用いる。「自己決断力」得点の理論上のrangeは9-45となり、「親への依存」得点の理論上のrangeは8-40となる。

(2) 性格特性の測定

市販されているYG性格検査を用いた。

III. 結果

「自己決断力」得点の平均点は30.93 (SD=5.84)、「親への依存」得点の平均点は24.30 (SD=6.58)であった。この得点を基に、「自己決断力」得点 \geq 31かつ「親への依存」得点 $<$ 25を「自立群」とし、「自己決断力」得点 $<$ 31かつ「親への依存」得点 \geq 25を「依存群」とした。この結果、「自立群」は57名、「依存群」は39名となった。

「自立群」と「依存群」でYG検査下位尺度の平均得点ごとt検定を行った。この結果をtable 1に示す。

table 1 自立群と依存群のYG検査平均得点の差の検定 (t検定)

	群	人数	平均	標準偏差	t 値	自由度	p
YGD 抑うつ性大	自立群	56	8.28	6.45	-2.48	93	*
	依存群	39	11.51	5.89			
YGC 気分の変化大	自立群	56	8.80	4.90	-3.25	93	***
	依存群	39	11.97	4.33			
YGI 劣等感大	自立群	56	6.53	4.67	-6.04	93	****
	依存群	39	12.33	4.47			
YGN 神経質	自立群	56	7.44	5.45	-3.93	93	****
	依存群	39	11.64	4.57			
YGO 主観的	自立群	56	8.07	4.80	-1.58	93	n. s.
	依存群	39	9.53	3.83			
YGC _o 非協調的	自立群	56	6.26	3.77	-2.64	93	**
	依存群	39	8.38	3.91			
YGA _g 攻撃的	自立群	56	9.64	3.94	0.95	93	n. s.
	依存群	39	8.92	3.08			

YGG 活動的	自立群	56	11.10	3.70	2.81	70.36	**
	依存群	39	8.61	4.58			
YGR のんき	自立群	56	11.01	4.08	0.04	93	n. s.
	依存群	39	10.97	4.88			
YGT 思考的外向	自立群	56	10.35	4.46	0.48	93	n. s.
	依存群	39	9.92	4.08			
YGA 支配性大	自立群	55	11.09	4.45	3.27	92	***
	依存群	39	8.02	4.47			
YGS 社会的外向	自立群	55	13.10	4.16	4.17	92	****
	依存群	39	9.38	4.39			
E系統値	自立群	57	2.36	2.31	-3.39	94	***
	依存群	39	4.17	2.90			
C系統値	自立群	57	3.75	2.16	2.28	94	*
	依存群	39	2.74	2.07			
A系統値	自立群	57	4.59	2.23	-1.08	94	n. s.
	依存群	39	5.12	2.52			
B系統値	自立群	57	3.64	2.20	-0.99	94	n. s.
	依存群	39	4.10	2.19			
D系統値	自立群	57	5.05	3.05	4.14	90.86	****
	依存群	39	2.69	2.50			

*...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

D (抑うつ性大) 尺度、C (気分の変化大) 尺度、I (劣等感大) 尺度、Co (非協調的) 尺度、E系統値で、「自立群」<「依存群」の有意差が見られた。

G (活動的) 尺度、A (支配性大)、S (社会的外向) 尺度、C系統値、D系統値で、「自立群」>「依存群」の有意差が見られた。

O (主観的) 尺度、Ag (攻撃的) 尺度、R (のんき) 尺度、T (思考的外向) 尺度、A系統値、B系統値では、両群間に有意差は認められなかった。

また、平均点でそれぞれの群のYG検査性格プロフィールを描くと、ともにA型の典型を示した。

IV. 考察

プロフィール判定からは、両群ともA型の典型を示したため、「自立群」・「依存群」ともに性格特徴としては、大きな違いはないものと考えられる。しかし、YG検査の下位因子からみた「自立群」と「依存群」での直接的な比較という点では大きく異なった。E系統値とD系統値で有意差を示したように、情緒安定 (情緒不安定) を示す各下位因子で「自立群」が「依存群」に比べ、より情緒的に安定している結果を示した。

渡邊 (1995) は「これまでの発達心理学では他者への「依存 (dependence)」から「独立 (independence) へ」という西欧で発達してきた公式のもとに、依存は抑圧・禁止されるべき

否定的概念として扱われてきた」と述べ、「依存は子どもの未成熟さの現れと見なされてきた…」(p.89)と指摘している。

本研究の結果からは、「自立群」も「依存群」も性格的な特徴に大きな差異はないにしても、両群を直接比較すると情緒の安定性に差異が認められている。もし、「相互協調的社会では依存は抑圧されない」のであれば、情緒の安定性を示す下位尺度得点でも有意差を示すまでの差異はないものと推測される。依存していることが自己の未熟さとして認識され、情緒的に不安定になっているとも考えられる。女性においても徐々に欧米的な「相互独立的社会」における自己理解に移行してきていることを示唆する結果なのかもしれない。冒頭にも述べた「急速に社会が変化する時代においては、価値観が固定されず、青年を捉える枠組みも常に修正していかなければならない。」ことの現れであることを示唆し、研究しつくされたテーマでも、常に、検討していかなければならない必要性を示した結果と考える。

V. 要約

本研究は、女性の自立心・依存心について性格特性から検討するものであった。調査対象者は、18歳から30歳までの女性170名(平均年齢22.39歳、SD=4.22)。自立心・依存心を測定する用具として、加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を三田(2003)が因子分析した結果のうち、第1因子「自己決断力」因子と第2因子「親への依存」因子の項目を用い、「自立群」・「依存群」の群分けを行った。性格特性の測定用具として、市販されているYG性格検査を用いた。

この結果、「自立群」・「依存群」ともYG検査性格プロフィールでA型の典型を示した。しかし、「自立群」・「依存群」を直接比較した場合、「依存群」が、情緒的に、より不安定であることを示した。

<参考・引用文献>

- ・Bruner, J.S., Jolly, A., & Sylva, K. 1976 Play-its role in development and evolution. Penguin Books
- ・欲野雅子 1994 女子青年の親子関係 岡本祐子・松下美知子(編)女性のためのライフサイクル心理学 福村出版 Pp.118-131.
- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 4, 336-340.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究, 15, 1-15.
- ・二関隆美 1975 青年文化の問題—青年社会学のための序説— 大阪大学人間科学部紀要 1, 187-249.
- ・西平直喜 1990 シリーズ人間発達4 成人になること—生育史心理学から—東京大学出版
- ・渡邊恵子 1995 自立再考—女性の自立・男性の自立— 柏木恵子・高橋恵子(編著)発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 Pp.77-101.